

Title	王暉とその師たち：姚樞・王磐・元好問
Sub Title	The three influences on Wang-Yun
Author	高橋, 幸吉 (Takahashi, Kōkichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2016
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.111, (2016. 12) ,p.84 (121)- 99 (106)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	関根謙教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01110001-0084

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

王惲とその師たち

— 姚樞・王磐・元好問

高橋 幸吉

一 はじめに

元初の翰林院において長らく影響力を持った人物として王惲（一二二七⁽¹⁾—一三〇四、字仲謀、号秋澗）が挙げられる。文學史上において大きく取り上げられることはあまりない人物である。しかし金朝滅亡後、南宋を滅ぼし元が中國を統一するまで、旧金朝系の知識人として北方の詩文を牽引した人物の一人である。金朝系知識人の系譜に連なる人物として、彼の文學觀を知る上で、その學術的背景を整理してみたい。

二 王惲の略歴

王惲は衛州汲縣（現在の河南省衛輝市）の人で、金朝に仕えた家系に生まれた。世祖フビライに文臣として召し出され、以後世祖・成宗に二朝に渡って仕えた。基本的に翰林院を中心として四十年ほどの官歴を持ち、元朝初期に影響力を持った文臣である。著書は非常に多く、『承華事略』二卷、『中堂事紀』三卷、『烏臺筆補』十卷、『玉堂嘉話』八卷を含めた『秋澗

集』百卷が現存する。

父王天鐸は金で忠顕校尉を務めた。従七品下の官で、吏としてはそれなりに出世をしている。王惲は汴梁で生まれ育ち、八歳のときに金朝が滅びたため父とともに家郷衛州へ戻った。王天鐸は地方勢力の吏員としてこの混亂期を生きた。王惲がいつ頃から師について學問を始めたのかは不明だが、自ら回顧するところによれば、十三歳頃からは詩や賦を作れるようになっていた。十五歳のとき趙鵬という人物の元で詞賦を學び、十七、八歳頃から近隣の蘇門山で讀書した。蘇門山は當時文人や學者が多く住んだ場所で、王惲はここで姚樞らに學ぶ機會を得た。また同じく近隣の共城（河南省輝縣）で王磐に學び、ここでは四、五年に渡って讀書することになる。定宗三年（一二四八）夏、母の病により歸郷し、翌年母は亡くなった。その後數年の活動は不明だが、恐らく服喪していたのだろう。

憲宗二年（一二五二）、河南の經略使となった漢人世侯の史天澤に、王惲は手紙を出している。求職活動であるが、このときは面會できただけで上手くいかなかったようである。この間、父に連れられて出かけたたり宴遊に参加したりしているが、同席した中には後に元朝で活躍した人物もおり、後々の人間關係に繋がっていく。憲宗四年（一二五四）二月には彼が終生忘れられない出來事が起こる。衛州を通りかかった元好問と面會し、詩文についてに教えを請う機會を得た。この一件は後に何度も回顧することとなる。憲宗七年（一二五七）八月に父王天鐸が病逝し、また喪に服する。その後は中統元年（一二六〇）、東平宣撫使として赴任した姚樞の元で詳議官となり、間もなく中書省へと拔擢され、翌年には翰林院へと遷る。ここから王惲の官途が始まり、大徳五年（一二三〇）に致仕するまで四十年ほどの官歴を歩むことになる。

三 姚樞

姚樞（一二〇三～一二八〇、字公茂、号敬齋、雪齋）は王惲が官に就く契機となった人物である。『宋元學案』卷九「魯齋學案」に立傳されているが、單純に儒學者と呼べる人物では無く、その經歷はなかなか複雑である。若くして學問に努め、金末の名士の一人宋九嘉からその才能を評價されていたというエピソードがある。平時であれば科擧及第を目指し

その後は官途を進む、ごく一般的な士大夫階級の人物であったであろう。金朝滅亡後にオゴタイの元へ赴き、その後楊惟中の元へ出仕した。彼は姚樞を非常に厚遇したようで、六歳年長であった姚樞を兄と呼んだ。楊惟中はもと金人であるがオゴタイの膝下で育ち、漢人として破格の待遇を受けた武將で、學術や知識人への關心も高い人物であり、武將としてより儒者に分類されることさえある。姚樞は軍中の儒者としてその幕僚を務め、太宗七年（一二三五）に襄陽府徳安を攻略した際、當代の理學者として知られた趙復を保護した。楊惟中と姚樞は燕京に太極書院を建設し、趙復を師に迎えて程朱の學を講じさせた。

トレゲネ皇后稱制元年（一二四二）、姚樞は官を辭して蘇門山に隱棲し小學や四書の注釋や講學に努めた。これは足かけ九年に及んだ。その間當時北方で有名な儒者であった許衡が訪れて姚樞から程朱の書を得たりと、ここでも理學の北傳に重要な役割を果たした。王惲がその講筵に連なつたのはこの時期である。オグル・ガイミシユ皇后稱制二年（一二五〇）、姚樞は蘇門山を出てフビライの元へ赴き、以降はフビライの謀臣として様々な建言を行った。例えば後に元軍の基本施策となる屯田策や、雲南遠征に際し北宋の曹彬の故事を以て民衆の不殺を説いたのは、姚樞の功績である。フビライから師と呼ばれたほどその信任は厚く、モンケがフビライを危険視し始めた際にはフビライに諫言したり、南宋攻略時にはフビライ自身が先の曹彬の故事を總司令官のバヤンに説いたり、史書にはその影響力の大きさを窺わせる記述が多い。中統元年（一二六〇）、統治の難しい山東方面を抑えるため、姚樞は東平宣撫使として派遣される。このとき王惲は東平の詳議官に任じられ、官に就く契機となった。その後姚樞は大司農や中書左丞などを務め、襄陽攻略前にその布石として後方での屯田經營を任されている。晩年は昭文館大學士や翰林學士承旨などの官にあつてフビライに度々進言し、中統十七年（一二八〇）に没した。

ここで再度王惲との關係を見てみよう。王惲は姚樞が蘇門山で講學していた時期に學生として知遇を得、これを手がかりに中統元年に官に就いている。宋福利氏・楊亮氏による年譜では二人の關係を「一般的なものとは異なる（非同一般）」と述べ、任官の契機となつたと見なしている。實際はどうであろうか。このとき王惲は姚樞に書簡を送っている。

某が如きは、稟性は疎愚にして、人に與るに樸直なり。斷へて它の技無く、徒だ切に心を休ましむ。爰に稚年自ら、特だ庭訓に乖くのみ。郷曲に讀書し、謾りに童子の雕蟲を攻むと雖も、蘇門に道を學ぶに及び、徒らに孫登の吟嘯を竊ふ。餘溢に沾ふに因りて、諸生に列するを得たり。…(中略)…俄かに瑤翰の圭竇に光臨し、先生の樂育の素心に見ゆ。喜びを爲すも勝る可けんや、憂ふる所を一たび寫かむ。何ぞ乃ち此に至るや。蓋し激すること有りて云ふならむ。身は賤貧にして處世は聞ゆる無く、跡は泥塗にして遇知るを貴と爲す。夫の燕の臺を築きて郭隗を師とするが若きは、豈に天下に之れ人無からんや。備の命を奉じて孔融に奔るは、世間に之れ己れ有るを喜ぶ所なり。將に衣を搯はんとするに日ならざるに於ひて、終に膽を瀝して以て誠に謝す。(如某者、稟性疎愚、與人樸直。斷無它技、徒切休心。爰自稚年、特乖庭訓。雖讀書郷曲、謾攻童子之雕蟲、及學道蘇門、徒竊孫登之吟嘯。因沾餘溢、得列諸生。…(中略)…俄瑤翰光臨於圭竇、見先生樂育之素心。爲喜可勝、所憂一寫。何乃至於此。蓋有激而云。身賤貧而處世無聞、跡泥塗而遇知爲貴。若夫燕築臺而師郭隗、豈天下之無人。備奉命而奔孔融、所喜世間之有己。將搯衣於不日、終瀝膽以謝誠。)

卷六八「姚敬齋に上る啓」(『王惲全集彙校』第二九三九頁、以下王惲の詩文は本書に據り頁數を示す。)

自己紹介の部分であるが、書簡を送った背景が垣間見える。魏晉の隱者孫登に嵇康が蘇門山で出會った故事を引きつつ、蘇門山で姚樞に學んだことを比喩する。ここで注意すべきは「俄かに瑤翰の圭竇に光臨し」である。瑤翰は書簡を美化して形容した語であり、圭竇は玉の一種である圭のように穴の空いた壁、轉じて卑賤の家の門戸を言う。つまり姚樞から王惲に手紙を出したことになる。もう一箇所、「備の命を奉じて孔融に奔るは、世間に之れ己れ有るを喜ぶ所なり」という表現もこれを裏付けるものであろう。備は劉備。孔融が黃巾賊に襲われた際、劉備に援軍を求めた。劉備は高名な孔融が自分の存在を知っていたことに感激し、すぐに三千の援軍を派兵した。『後漢書』孔融傳に見える故事である。孔融は自分に手紙をくれた姚樞の比喩であり、山東にまつわる故事を用いて、當時北海の相であった孔融と今回東平宣撫使として赴任してきた

姚樞を重ね合わせている。自ら積極的に求職活動を行った史天澤や張文謙への上書と較べると、先方を褒め稱える内容ばかりで無く兩者の關係に言及している点において、少々趣を異にする。⁶⁴恐らくこの文章を論據として、二人の關係が特殊であったと「王惲年譜」で判断をしたのだろう。姚樞は東平着任後、自分の門生の中で特に優秀だった王惲を思い出し、手紙を送ってその幕下に招聘した、と。

ではその他に、王惲の文集中でどのように姚樞に言及しているのか見てみよう。姚公や雪齋、敬齋という呼稱で姚樞に言及している詩文は重複を除き23篇ある。大半が他の文臣とともに列擧されるか、自分より上の世代の文臣として後述の王磐らとともに擧げられている。王惲は翰林院に奉職したという経緯も有り、宴席などで同席する機會は多かったようだが、師としての姚樞や、その教えについて回顧することは全く無い。唯一の例が先に引用した「姚敬齋に上る啓」である。また彼から教授されたであろう理學も、その文中からは窺うことは出来ない。學問的關心はほぼ無いと言ってよいだろう。『宋元學案』でも王惲の名は見られない。その子王公孺らが姚樞を彼の師のひとりとして擧げてはいるが、⁶⁵その師承關係は極めて希薄である。たまたま姚樞の講學を聽講し、後年その縁で官を得たという程度であろう。王惲の詩文から窺える二人の關係は、同僚となつて以降頻繁に同席したり書簡を送つたりと親密さを窺わせるが、師としての姚樞の姿はその文集中に全く現れない。このような門生が姚樞の記憶に残るだろうか。仕官時の王惲と姚樞の關係を「一般的なものとは異なる（非同一般）」と見るには、少々無理があるように思われる。

元朝が科擧を恢復するまで、官に就くには人間關係を頼りに推薦・採用してもらうか、あるいは吏となつて出世し官に轉ずるかという、二つの方法しかなかった。旧金朝系知識人が集まっていた東平には當然知人がいたであろう。父王天鐸は意識的に息子を連れて、自分の友人や名士と面會しており、それらの努力が實つたと言えよう。おそらくは知人を通して姚樞に推薦して貰い、當地に着任したばかりで幕僚を抱える必要があつた姚樞が手紙を出し、王惲は仕官する事が出来たと推測される。さらにはこの機會にその才能を高く評價され、姚樞はすぐに王惲をフビライに推擧したのである。

四 王磐

王磐（一二〇二～一二九三、字文炳、号鹿庵）は廣平永年（現在の河北省邯鄲市永年縣）の人で永年先生とも呼ばれる。金の正大四年（一二二七）の經義進士。金朝にも出仕し元好問らとも面識があったが、モンゴルに仕えて以降活躍し、『元史』卷一六〇に立傳されている。王磐は金朝滅亡前後に一時期南宋襄陽に寄寓して官に就いたが、太宗八年（一二三六）に北方に戻り、定宗元年（一二四五）前後から蘇門山で講學した。この時期に王惲は王磐に就いて學んだ。『易』に長じて邵雍の學説を重んじた麻九疇の弟子であり、王磐自身も『易』を得意として理學を受容した。憲宗五年（一二五五）、東平府で府學が復興されるとその教官として招かれ、多くの人材を育てた。中統元年（一二六〇）に益都府宣撫副使となったが、益都を中心として勢力を誇っていた漢人世侯の李璫の反亂を察知すると單身で益都を脱してこれを報告し、フビライから高く評價された。その後は大半を翰林院で過ごし、多くの人材を推舉するとともに、日本への遠征に反対するなど、フビライの不興を被る直言も行っている。

金朝滅亡前後の華北はモンゴル兵による略奪や野盜が横行し、統治機構や治安維持が崩壊しており、モンゴルに歸順した漢人世侯が知識人の保護や文教政策を担っていた。その中で最も熱心にこれらの事業を行ったのが東平の嚴實・嚴忠濟父子であり、當時多くの旧金朝系知識人たちがその配下に加わったり、身を寄せたりしている。⁶⁾ その幕僚は中統年間にフビライの元へ拔擢され、元朝初期の翰林院を形成した。また東平府學では金代の科擧で重視された詞賦を教授しており、文章起草の需要に応えて元代には東平出身の文官が官界の潮流のひとつとなった。例えば後に袁桷は、翰林院と國子監では東平府學出身者がその六、七割を占めると述べている。⁷⁾

王惲は王磐に就いて學んだ時期が最も長く、文中でも往事のことに度々言及している。そして同じく翰林院に奉職する同僚としても終生非常に親しい交遊を續けた。文集中で鹿庵、永年という呼稱で言及している詩文は57篇にもほなる。

元初の文學觀の特徴として、功利的で教化を目的とするという點が指摘されている。これを最も早く自覺し言語化したの

が王磐である。

僕は弱冠自り、時に永年先生に従ひて學を問ふ。先生は科擧の既に廢さるるを以て、士の特立なる者は當に有用の學を以て心と爲すべしとし、是に於いて日び『通鑑』中の命題に就きて、或ひは其の義有りて其の辭亡く、或ひは其の辭存して意の至らざる者、之を課して以て日びの業と爲す。(僕自弱冠、時從永年先生問學。先生以科擧既廢、士之特立者當以有用之學爲心、於是日就『通鑑』中命題、或有其義而亡其辭、或存其辭而意不至者、課之以爲日業。)

卷四一「文府英華叙」(第一九七二頁)

科擧というシステムが無くなり、新政權の行く末も杳として分からず、これまでの方法では統治機構に參與することは出来なくなった。その中であつて儒家の功利主義に立ち返り、亂世のなかで「有用」という點を見出して主張した。それはともすれば形骸化していた經世濟民のための、實踐としての學問である。そしてその例として『資治通鑑』をテキストに、その意圖について考察を重ねたことを擧げる。

王磐は理學の影響を強く受けていたようであるが、その一方で王惲には理學への關心があまり見られない。王惲には王磐の教えや言行を記した文章も多く、その内容は詩文を中心に書法や史學など幅廣い。だが經學や理學に關する記述は非常に少なく、王惲の關心が窺われる。特に理學については王磐や姚樞の教えを全く書き留めておらず、少々揶揄する口吻すらある。徒單公履(号顯軒)が「天下のことには理を以ても分からないことがある」と言うのに對して王磐が反對し、これに對して徒單公履が「たとえば大きな都市の南にある柳の木は實際に見なければ、東西に何列、大小何株あるか分からない」と例を擧げると、王磐は黙ってしまい一堂が大笑いしたという。⁹⁾王磐と理について言及した唯一の記述である。

詩文に關する記述は全體的な原理原則を述べたものと、音韻學的分析を述べたものとに大別される。まず文のあるべき姿として「文章は自得を以てし、前人の一言を踏襲せざるを貴と爲す(文章以自得、不踏襲前人一言爲貴)」¹⁰⁾と述べる。この

考え方は金末の李純甫一派と同様である。だが同時に「其の意を取りて其の辭を取らず、終に是れ人の足跡に踵くを恐るは、俱に孟軻氏の一字皆な經世の大法を存し、其の辭は莊にして精彩有るに若かざるなり（取其意而不取其辭、恐終是踵人足跡、俱不若孟軻氏一字皆存經世大法、其辭莊而有精彩也）」という。「其の意を取る」とは宋代詩學において特に重要な語で、典故となる作品の情景や構成などを踏まえて作詩する方法である。「人の足跡に踵く」とは先人や他者の作品と同様の詩文を作ったり同じ表現を用いたりすることの比喩で、これを避け独自の作品を創り出すことは、李純甫も類似の表現で主張している。いわば「前人の一言を踏襲せず」と真逆の行爲である。これらをまとめると、文章の獨自性を重んじつつもそれにとられず、より重要なのは文章が「經世の大法」を體現することにある。典型的な儒家の文學觀を有しつつ、表現レベルにおいては李純甫に近い主張であるが、表現の獨創性のみを追求することはないものである。

そのような文章を書くに當たって、以下のような心得を述べている。

鹿庵先生説いふらく、「學を爲すには精熟を要すに務め、當に鎔ながきて汁と成し、瀉ながして錠と成し、團かためて塊と成し、按じて餅と成すべし」と。憚おそ以謂わらく、文を作すこと尤も當に是かくの如くなるべし。（鹿庵先生説、「爲學務要精熟、當鎔成汁、瀉成錠、團成塊、按成餅。」憚以謂、作文尤當如是。）

卷九七『玉堂嘉話』卷五（第三八九七頁）

學問の脩練を鑛物から成型物（ここで言う餅とは銀などを円盤状にしたもの）にする過程になぞらえて述べたものだが、王惲はとりわけ文章の作成においてこれが最も當てはまると考えている。「鎔ながきて汁と成す」という表現は象徴的で、不純物を取り除いて精鍊する意味にも、經典や先人の詩文を渾然一體とする意味にも解せる。そしてこれを錠から大きさのある塊にし、最後に形を整えて一つの學問ないし詩文として作り上げるのである。

また王惲自身が作文についてのみ言及した例として、次のように述べる。

鹿庵先生曰く「作文の體、其の輕重先後は猶ほ好事者の畫くを以て娛しむ客の、必ず先づ其の尋常を示し、而して精妙なる者をして其の後にさしむるがごとし」と。(鹿庵先生曰「作文之體、其輕重先後猶好事者以畫娛客、必先示其尋常、而使精妙者出其後。」)

卷九四『玉堂嘉話』卷二(第三八二頁)

文を爲すに當たつて強調點やその陳述の配置は、繪畫を趣味とする者がまず基本的なところを描いて、細かく巧妙な點はその後から描いていくことに喩える。王惲はこの言葉に啓發されるところがあり、次のように續ける。

予偶悟りて曰く：(中略)：「文字を作すも亦た當に科舉の中従り來たるべく、然らざれば、豈に唯だ格律に中らざるのみならんや、而して汗漫披猖し、首無く尾無く、是れ出入に戸に由らざるなり」と。又た云ふ、「後學は科舉を業とせざると雖も、唐一代の時文律賦に至りては、亦た當に披閱して不忽かにす可からざるべく、其の中體制規模は多く妙處有り」と。(予偶悟曰：(中略)：「作文字亦當從科舉中來、不然、豈唯不中格律、而汗漫披猖、無首無尾、是出入不由戸也。」又云、「後學雖不業科舉、至於唐一代時文律賦、亦當披閱而不可忽、其中體制規模多有妙處。」)

作文に當たつて科舉の有用性を認識し、金朝の科舉で課された詞賦にも積極的な意義を見出している。詞賦の學も有用なものであり、科舉を目指すものでなくとも唐代に流行した律賦を読み、そこから優れた點を學び取るべきと考える。前述した王磐の「有用の學」を、王惲が繼承している証左であると言えるだろう。そしてこの指摘はまさしく、東平府學で詞賦の學が繼承され、そのことによつて文章起草の能力を養い、有力な官僚供給源となつたことと符合するのではないだろうか。

五 元好問

元好問（一一九〇～一二五六）字裕之、号遺山）は金代詩文の集大成者としてこの時代を代表する人物であるとともに、金朝一代の詩集『中州集』を編纂した人物としても知られる。『四庫全書總目提要』は王惲『秋澗集』について「惲の文章は自ら謂ふらく元好問に學べりと。故に其の波瀾意度は皆な前人の矩矱を失はず、詩篇筆力は堅渾、亦た能く遺山を嗣響す」と述べる。以來文學史や事典でも彼は「元好問に學ぶ」と記述される事が多い。だがその経歴を見ると、元好問に會つたのは前述の憲宗四年（一二五四）ただ一度だけである。當時北方詩壇の盟主として確固たる位置を占めていた元好問から詩文の教えを受けたことは、王惲にとつて生涯忘れがたい出来事であり、面會した日のことを克明に記憶している。

遺山先生は向しむか頤齋張公と沐よ自り北歸し、衛を過ぐ。先君は近作一卷三十餘首を録して贊と爲すを命じ、二公を賓館に拜し、同志雷膺在り。…（中略）…先生は几に憑りて東に嚮かひて坐り、予ら二人は前に侍り、獻ずる所を披きて狂斐し、且つ讀み且つ竄あだむ。即ち其の後、筆は數語を以て其の非是を攬よひ、且つ循誘の善意を見し、而して體要の工拙と、音韻の乖叶に於ひて尤も切にして懇なるを致す。（遺山先生向與頤齋張公自沐北歸、過衛。先君命録近作一卷三十餘首爲贊、拜二公於賓館、同志雷膺在焉。…（中略）…先生憑几東嚮坐、予二人前侍、披所獻狂斐、且讀且竄。即其後、筆以數語攬其非是、且見循誘善意、而於體要工拙、音韻乖叶尤切致懇。）

卷四五「遺山先生口誨」（第二二六頁）

これは至元二十五年（一二八八年）十二月に書かれた文章で、元好問との面會から三十五年も後のことであり、王惲は六十二歳になっていた。至元二十年に病のため山東東西道提刑按察副使の職を辭し、至元二十六年に福建閩海道提刑按察使に就くまで、郷里衛州で過ごしていた時のものである。彼を元好問の門弟と呼ぶにはその關係が余りに希薄なのであるが、私

淑し熱烈に傾倒していたことは間違いない。王惲は夢の内容を記した詩文が数多くあるが、この文章を書いた年には夢に二度も元好問が現れており、それが年末に元好問との思い出を文章化する契機になったのかも知れない。ここで記されている言葉は王惲自身の言葉で再構成されているだろう。「體要（簡潔で適切であること）」という語は『書經』に端を發して『文心雕龍』で多用されている文學批評用語だが、元好問はこの語を文集中で全く使っていない。だが發言全體の内容はその著「詩文自警」などとも符合し、元好問の詩學に沿うものである。

元好問との面會はどのような経緯で實現したのか詳らかで無い。王惲の文章を見ると、父王天鐸が王惲とその友人雷膺を伴って訪問したように讀める。王惲は父王天鐸の交友關係を「碑陰先友記」にまとめているが、ここには元好問の名も、前記文章で挙げられている張德輝（頤齋張公）の名も無い。王天鐸が友人の知人というような間接的關係を頼って我が子を引き合わせたのであろうか。同行した雷膺は金末の文章家として名高い雷淵の子であり、雷淵は元好問の親しい友人であったので、雷膺がこの面會を實現させ、王惲父子はこれに付随しただけかも知れない。王惲とその家系は元好問と何の接點も見いだせないのである。

いずれにせよ王惲は北方文壇の象徴的人物であった元好問と青年時代に面會でき、しかも詩の添削を受け、教えを頂戴した。前引の文章に續いて元好問の發言を書き記している。

説既に竟はり、先生は後に昌言して曰はく、「千金の貴きは、卿相に逾ぐるは莫く、卿相なる者は、一時の權なり。文章は、千古の事業にして、日星の昭回し、經緯天度の如く、少しも易ふるべからず。顧るに此の握管は鉛鋒の微なりと雖も、其の重なるは、織埃をして化して泰山と爲さしむ可く、其の輕なるは、泰山をして散じて微塵と爲さしむ可く、其の柄用は此くの如き者有り。況んや老成は漸く遠く、斯文將に在るも、後來の女等、其れ勗むるかな替ふる母れ」と。坐客四たり悚れ、惘然自失し、覺へず嘆じて愧を發す者有り。既にして鼓動き客去り、先生は衾を覆りて臥せ、予ら二人も亦た頭を垂れて壁に倚り熟睡す。（説既竟、先生後昌言曰、「千金之貴、莫逾於卿相、卿相者、一時之

權。文章、千古事業、如日星昭回、經緯天度、不可少易。顧此握管鉛鋒雖微、其重也、可使纖埃化而爲泰山、其輕也、可使泰山散而爲微塵、其柄用有如此者。况老成漸遠、斯文將在、後來女等、其勗哉母替。」坐客四悚、有惘然自失、不覺嘆而發愧者。既而鼓動客去、先生覆衾卧、予二人亦垂頭倚壁熟睡。）

『中州集』を撰して金朝の歴史と文化の保存に奔走した、晩年の元好問らしい發言である。文章とは永遠に不滅の事業であり、太陽や星が天を巡り、これを觀測する天の緯度經度や天を区切つた單位である天度のように絶対に變えられないものと規定する。「坐客四たり悚れ」とは教えを受けた王惲と雷膺だけでなく、同席した王天鐸と張德輝も含めた、その場にした全ての人間が慄然とするほどのものだったということであろう。

ただし王惲の文集全體を見渡したとき、元好問の文學論に特別な注意を向けているようではない。少なくとも「論詩絶句」やその他の詩論に關する記述に言及している例は無い。だがその作品については間違ひ無く熟讀しており、詩中に典故として多く用いている。元好問は氣に入つた詩句を繰り返して使う「復句」癖が指摘されており、これらの詩句を王惲も踏襲して用いている。元好問が最も多用した「一片傷心畫不成」についても一例だけはあるが、この句をそのまま用いている。

連日風沙此日晴 連日の風沙此の日晴れ

東君有意作清明 東君意有りて清明を作す

垂鞭醉入宮城去 鞭を垂れ酔ひ入りて宮城を去る

一片傷心畫不成 一片の傷心畫かんとして成らず

元好問が好んで用いた「動詞＋不成」という言い回しを、王惲はその文集集中でほとんど使っていない。そのためこの句の表現が王惲の嗜好にとりわけ沿うものではなかったであろう。ここでは掃苔の日である清明節と、金末文壇が最盛期を迎えた故都汴梁（開封）という時間的・空間的要素を踏まえ、往事の人々や自身がこの地で過ごした幼少期を思つて敢えて元好問の詩句を一字一句改變せずに用いたのだろうか。

他には「青衫還見讀書孫」という詩句が気に入っていたようで、三首に用いている。

翠琰盛傳千字誄

翠琰盛んに傳ふ千字の誄

青衫還有讀書孫

青衫還た讀書の孫有り

卷十六「張府君の墳丘に題す」(第七五〇頁)

正似紫峰遺澤遠

正に紫峰に似て遺澤遠し

青衫還有讀書孫

青衫還た讀書の孫有り

卷二十八「杜郎中の二子字説の卷後に題す」二首其の二(第一三八九頁)

德澤未應移五世

德澤未だ應に五世を移すべからず

青衫長見讀書孫

青衫長へに見ゆまみ讀書の孫

卷三十一「朱家府を過ぐ並びに序」四首其の四(第一五三二頁)

元代で最も巻帙の多い文集を残した王惲であるが、作品数が多いと類似の言い回しが散見することは否めない。この三例も元の句の一字を改變したに過ぎない。だが逆に言えば一字でも改變する意圖があり、一方偶然かもしれないが「汴梁清明」詩では「一片傷心畫不成」という句に全く手を加えずこれを結句として用いている。結句に据えたという點と改變なく用いた點に、典故への敬意と金朝に對する王惲の哀惜を見出しても良いだろう。

六 おわりに

以上、王惲と關わりのある三人の師について、その學問的關係を考察した。姚樞は王惲が官界に進出する契機となったが、具體的にその教えについて言及することはなく、師承關係は極めて希薄である。

王磐は若年時から晩年まで、半世紀に近い交遊があり、王惲はその言動を數多く記録している。最も影響が強く關係が深い師であるが、王磐が注力した理學についてはほとんど興味を示さず、文集中の言及も極めて少ない。だが間違ひ無く理學を學んでおり、「書太極圖後」（卷四四）では周敦頤への評價を述べている。また「易解序」（卷四二）、「紫山先生易直解序」（卷四三）では『易』に對する認識を記すが、五經のなかで『易』に關してのみ序を書いているのは、『易』を得意とした王磐に學んだことを裏付けるものであろう。ただ王惲にとつて理學は最大の關心を向ける對象ではなく、これを専ら論じた文章は少ない。

元好問は一度面會して教えを受けただけで、王惲を彼の弟子と見なすのは難しい。だが終生傾倒してその詩文を學んだことは間違ひ無い。この時期の北方詩人は元好問の影響を何らかの形で受けており、何ら特殊なものではないが、その傾倒の強さ故に四庫提要でも元好問の影響を特記したのであろう。ただこちらにも面會時の記憶や各地で見たその墨跡、書簡などに強い執着を示すが、元好問の詩論や文學論については一切言及していない。元好問が黃庭堅らの文學論を下敷きに自己の文學觀を述べたのとは異なり、王惲が序跋などで自らの觀點を披瀝することはかなり少ない。

王惲が王磐や元好問から受け継ぎ最も關心を示したのは、おそらくは歴史であらう。そして今現在の出來事を記録し、歴史の資料とすることこそが、彼の一生の仕事であった。百卷という詩文集を残したのも、詩文の取捨選択に欠けると批判されるが、これは意圖的に残したのではあるまいか。王惲の生きた時代はモンゴルによる文化破壊の影響を生々しく體驗している。金朝の先人の、ほんの一世代前の詩文を見たくとも、その大半が散逸しているのである。

- (1) 王惲の生年には他に一二二六年、一二二八年という説がある。本稿では楊鏞『元詩史』（人民文學出版社、二〇〇三年）及び楊亮・鍾彥飛點校『王惲全集彙校』（中華書局、二〇一三年）の説に従う。
- (2) 山東は金代から農民反亂が頻發しており、政情の安定しない地域であった。例えば海陵王完顔亮の死後、耿京がこの地で反亂を起こして敗れ、その麾下にあった辛棄疾は南宋へ走った（『宋史』卷四〇一「辛棄疾傳」）。その後は李全が一帶を掌握し、金・モンゴル・南宋との間で半獨立國のような勢力を築いていた（『宋史』卷四七六、四七七「李全傳」上下）。李全の子李璫は元に歸順したが後に反亂を起こし（『元史』卷二〇六「李璫傳」）、これを制圧するに及んでようやくこの地の形勢が安定に向かった。
- (3) 宋福利・楊亮撰「王惲年譜」、『王惲全集彙校』第四〇四五頁。ここでは王惲と姚枢の關係について、その特別さの論據は師弟關係以外に示していない。
- (4) 「上經略史公啓」（『王惲全集彙校』第二九三五頁、「上張左丞啓」（第二九四一頁）。
- (5) 王公孺「大元故翰林學士中奉大夫知制誥同脩國史贈學士承旨資善大夫追封太原郡公諡文定王公神道碑銘」、『王惲全集彙校』第四四一頁。
- (6) 金朝滅亡前後の東平については陶然等著『宋金遺民文學研究』（浙江大學出版社、二〇一四年）第五章「金元之際的東平文人群」を参照。
- (7) 袁桷「送程士安官南康序」、『清容居士集』卷二四。浙江古籍出版社、二〇一五年。
- (8) 顧易生・蔣凡・劉明今著『宋金元文學批評史』第四編第三章「元代前期詩文批評」第一節「北方諸家的詩文批評」。上海古籍出版社、一九九六年。
- (9) 卷九六『玉堂嘉話』卷四、第三八九四頁。
- (10) 卷九四『玉堂嘉話』卷二、第三八〇二頁。
- (11) 同前。
- (12) 「李屏山教後學為文、欲自成一家、每日、『當別轉一路、勿隨人脚跟。』」（『歸潛志』卷八、中華書局、一九九七年版、第八七頁）。
- (13) 『四庫全書』秋澗集提要。
- (14) 卷四四「記夢」（至元二十五年八月十三日夜）には畫像として現れ、同卷「詩夢」（十一月七日）では夢の中で元好問の樂府（詞）

について討論し、併せて詩を作っている。

(15) 姚奠中主編・李正民增訂『元好問全集』（増訂本）卷五二『詩文自警』輯録、第一則・六則・九則・十二則で文章や語句の簡潔さ及び音韻について述べている。山西古籍出版社、二〇〇四年。以下、元好問の詩文は本書に據る。

(16) 元好問の「復句」癖については清代に趙翼『陔余叢考』、潘德輿『養一齋詩話』が指摘し、錢鍾書も『談藝錄』で言及している。詳しくは胡傳志「遺山復句論」（安徽師範大學學報（人文社会版）二〇一三年第六期）を参照。

(17) 卷九「懷州子城晚望少室」、卷十「十日作」、卷十一「家山歸夢圖」三首其三。他にも「畫不成」のみを用いている例は三首ある。

(18) 卷十三「初挈家還讀書山雜詩」四首其三、卷十四「梁氏先人手書」。

(19) 『元詩選』初集卷十五「然所存過多、頗少持擇、必痛加芟削、則精彩愈。」『四庫全書』本。